920　email t-hatsu@tokyo-np.co.jp

T発

うらかた有情

氷上の個性 まとめる旋律

氷上の芸術と称されるフィギュアスケートの演出に音楽は欠かせない。クラシック、ポップス、ロック…。パックに流れる音楽のジャンルはさまざまだ。アイスショーの音楽監督はそれらの編曲、指揮、バランス調整などを一手に引き受ける。

総勢三十五人の演奏者がリンク隣のステージに陣取る。バイオリン、チェロ、オーボエやクラリネットに、エレキギターやドラム…。クラシックとロック系の混成楽団を、塩入俊哉さん(五三)は自らもピアノとキーボードを操りながら、指揮した。

今月一、二両日、代々木第一体育館で開かれた「アート・オン・アイス」。荒川静香さん、安藤美姫さん、高橋大輔さん、ステファン・ランビエルさん（スイス）ら国内外のトップスケーターが、華麗な演技で観客を魅了した。

パックに流れたのが、英国のメゾソプラノ歌手キャサリン・ジェンキンスさんと元チェッカーズの藤井フミヤさんの歌声だ。

音楽監督の仕事は楽団員の選考、編曲、楽器同士のバランスを整える音合わせなど多岐にわたる。「今回はポップスとクラシックの音を両方出せる楽団員を選考するのが大変だった。両方を同じメンバーでやるなんて普通はあり得ない。自分が今までやってきたミュージシャンから、この人ならというのを探した」

編曲ではスケーターの個性を引き出せるように楽譜を何度も書き直した。開演までの三週間はショーの準備に没頭し、ジェンキンスさんの歌ではクラシックらしい荘厳な雰囲気を、藤井さんの時はポップスのグループ（リズムのノリ）を作り上げた。

桐朋高校（国立市）在学時からピアニストとしての評価は高かった。ところが最高峰の東京芸大を受験した際に、鍵盤の微妙なタッチの差異でロックバンドなどでも活動していたことを試験官に見破られ不合格に。しかし多彩なジャンルに挑戦する姿勢は音楽人生に大きな影響をもたらし、歌手の西城秀樹さん、稲垣潤一さんの音楽プロデュースや、さまざまなクラシック奏者との共演など幅広い活動につながった。

ここ数年は、十二月に行われるフィギュアスケート全日本選手権の最終日を飾るエキシビションの音楽監督も担当している。「エキシビションで演奏予定だった曲を『競技の成績が悪かったから明るい曲では演技できない』と直前に変更する選手もいる」。新たな曲の編曲作業を徹夜でこなして会場入りし、リンクの氷上に設置されたピアノを凍えながら数時間、演奏し続けたこともあった。これら数々の経験が感性を磨いていく。

「アート・オン・アイス」ではジェンキンスさんと藤井さんから演奏に対する注文が一つもなかった。それほど完璧な準備で臨んだということだ。「長い音楽生活で築くことができた宝物である仲間と演奏する作品が、あうんの呼吸で愛あるものに仕上がっていく。その様子をどこか客観的に見ている。『みんなすごいや』という感じです」。楽団員に笑顔で敬意を表した。

スケーターの演技を見つめる塩入俊哉さん㊨

平成写真館

リハーサルで華麗な演技を見せる荒川静香さん㊨と藤井フミヤさん

しおいり・としや　1960年、八王子市生まれ。ピアニスト、作・編曲家、プロデューサー。国立音大大学院修了。宮本文昭（オーボエ）、古川展生（チェロ）、川井郁子（バイオリン）らをプロデュースする傍ら「Tokyo 3 a.m.」などソロCDをリリース。今年4月、新たな音楽の可能性を求めてノブ（ディジュリドゥ、石笛）、楯直己（パーカッション）と「インフィニティ・アーツ・ムゲン」を結成した。

楽団員の選考から演奏の指揮まで、仕事は多岐にわたる

文・鈴木邇理／写真・松崎浩一、武藤健一／紙面構成・志賀俊郎